

(仮称)

# ゆきのさと自由が丘通信

《2020年4月、小学校開校をめざして》

認定NPO法人北海道自由が丘学園・ともに人間教育をすすめる会 / 「自由な小学校」をつくる会  
札幌市豊平区月寒東 1-15-5-11 ☎(011)858-1711

## 堀真一郎さんの講演会

去る9月2日(土)13:30～北大クラーク会館大集会室で行われた「きのくに子どもの村学園」学園長：堀真一郎さんの講演会は、40数名の参加で充実したものとなりました。

講演の内容は、パワーポイントの映像を見ながら、まずは「わかやま」「かつやま」「北九州」「南アルプス」と現在4校ある学園の概要と実際のような様子について説明がありました。次に、自由な教育の根底にあるニールやデューイの思想、そこから学園が教育の基盤とした基本原則やプロジェクトの方針などについて解説がありました。そして、再び子どもたちの活動の実際が紹介されました。その後、質疑に入り、学園設立に至る実務的な裏話やら、子どもたちのようす、保護者の考え方、スタッフに関わるあれこれなど、実例をまじえながら興味深いお話が続きました。

また、質疑の中で触れられたスタッフ同士の話し合い・学び合いの質の高さをうらやましく思いました。何気ない言葉遣いについても、「もう〇分しかないよ！急がないとできないよ。」ではなく「まだ〇分あるよ。〇〇までできたね。」と声をかけようなど、細かなことまで受け手の立場になって話すことを確認し合っているとのことでした。子どもたちの自由と大人の忙しさは比例する、と聞きましたが、それは充実した忙しさ・やりがいで、雑務に追われ憔悴する徒労感ではないはずです。



そして今回は、これまでの「つくる会」の活動で顔を拝見したことのない新たな参加者が半数ほどいらしたのが、主催者としては嬉しかったです。皆さん関心の高い方ばかりで、「きのくに」のプロジェクトに取り組む子どもたちの表情と同じような真剣な表情で聞き入っていたのが印象的でした。

参加者のアンケートからコメントをいくつか紹介します。

- 小学生か中学生だった頃、きのくに小学校のテレビ番組を見ました。その時、私は「この学校に行きたい!!」と思ったことを今でも覚えています。全校生徒50人にも満たない小さな小学校だったので大きな学校よりはのびのびと自然の中で学校生活を送ることができた方だとは思いますが、今日、お話をきいて、やっぱりいいなあと感じました。きのくに北海道校ができたら素晴らしいと思います。
- 来年小学校入学の息子がいて、興味があって参加しました。幼稚園は森の幼稚園のような場所があっても、小学校は近くにないなあと思っていました。このような動きは素敵だなと思います。
- 小1、小4の子供達は学校は楽しくないと言っています。日々、楽しんで学校に通うことができたら本当に親子とも幸せだと思います。
- 4才の息子がいて、「きのくに子どもの村学園」とはどのような所なのかとても気になって興味がありました。北海道でもこのような学校をつくりたいと思っています。きのくに村にできたら日本全体に広がったら皆が幸せになるように思います。とても貴重なお話ありがとうございました。

○たいへん共感する部分の多いお話でした。ありがとうございました。まず、教師として生徒たちに対する姿勢について考えました。また、普段の学校生活、教育活動に生かせることはないかと考えながら聞いてきました。けれども長期にわたるプログラムに基づいた継続的な活動の必要性を強く感じます。少しずつでも、基本姿勢を浸透させていきたいと思えます。



今回の記事だけでなく、今後また近いうちに特集記事を掲載していただけるとの連絡を記者さんから受けています。9月29日(金)、30日(土)には、自由が丘の20周年行事がありますが、どのような記事になるか、お楽しみに！

## 「きのくに子どもの村」を学ぶ！学習会

とき：10月21日（土）15：00～17：00

ところ：自由が丘学園月寒子ども館（豊平区月寒東 1-15-5-11、福住駅徒歩 10 分）

内容：堀真一郎著『きのくに子どもの村の教育』（黎明書房 2013 年）をテキストに、「きのくに子どもの村」を学ぶ！

「きのくに」の教育や自由な教育の学習会をしようと思います。本を用意できなくても部分的にコピーしますし、9月2日の講演会アンケートの質問にも答えながら、より「きのくに」の理解を深め、北海道の「自由な小学校」づくりを展望できる座談会にしようと思っています。お子さんをこんな学校に通わせたいなという方、自由な教育・学校づくりに興味があるという方など、どなたでも構えず気軽に参加してください。また、お時間の許す方は、そのあと懇親会でもと考えています。



## 「自由な小学校」をつくる会の呼びかけ人の Life History

私、NPO 理事：細田孝哉が、北海道に「自由な小学校」をつくる会の呼びかけ人になっていますが、なぜ一介の学校教師が呼びかけ人になっているか、Life History を含めてお話しておこうと思います。

私は、中学生までは何度か転校を経験しながら、よき先生、友達に恵まれ、楽しい学校生活を送っていました。ところが中3になると受験を控え、友達から勉強ができることへの揶揄などがあり、成績で人間関係が歪むことに矛盾を感じるようになりました。

高校は進学校へ進んだものの、先生方の話は大学受験ばかりで、無味乾燥な言葉だけの知識を詰め込む勉強に矛盾を感じ、学習意欲は減退、比較的得意だった数学もさっぱり、おまけに周囲の秀才の雰囲気にも気圧されて成績は低迷し、サッカーだけが楽しみな1年でした。高2の夏頃、教育学を大学で教えている叔父の刺激もあり、理系をやめ、教育学部へ進学してあるべき教育のあり方を考えようと思うようになりました。叔父から鈴木秀一先生のお名前を初めて聞いたのもこの時です。高3は、大学さえ入れば思う存分考え抜くことができると、悩みを棚上げにして無味乾燥な受験勉強に打ち込みました。

さて、低空飛行で滑り込んだ大学では、教養部で一般知識の単位習得が待っており、受験勉強の反動も手伝って、本当の勉強は違うなどと自分をごまかし2年生を2度やるということになりました。サッカー部の先輩のこぼれ「4年で出る気で頑張ったら、5年で出られるぞ！」は至言です。学部に移行してからは、現代の学校教育の矛盾について考えながらも卒論もテーマが定まらず、教育研究どころか、やっぱり自分は文献研究より子どもたちと格闘する教育現場に向いている、現場を経験しないと教育を語る資格はない、と思うようになりました。

教員採用は、校内暴力が課題となっていた80年代半ばでしたので、採用面接での「体を張って頑張ります！」を受けた体力採用だったのだらうと思います。教員免許は中・高社会科なので、教師をやるなら成績で輪切りになっていない中学校の方が面白いと思いました。札幌市で中学校3校に勤務し、先輩教師に学び、教えられることに感謝しながらも、やはり様々な矛盾や限界を感じ、とりわけ管理的な生徒指導にどうしようもない抵抗を感じる日々でした。そんな折、高校への転勤話があり、高校の方が自分が力を入れたい教科指導とサッカー部に集中できると思い転勤。思いは一部その通りで、しかし高校は高校で学校の評判のために生徒指導もせねばならず、自分が嫌悪した受験勉強を生徒に課す立場になってしまいました。そんな中、教員生活のはじまりから参加していた北海道に自由な学校づくりをめざす運動で、自由な学校が実現したらいつでもそちらのスタッフになるぞと思いながら、夕張へも出前授業に出かけたりしていました。ところが夕張の中学校プレスクールは挫折。



それでも、大学院に学ぶ機会も得て、公民科目現代社会で年間通して単元テーマ学習を組む実践をしたり、開発教育（国際理解教育）に力を入れ、共同的な学びをある程度実現することができるようになりました。しかしやはり、教育制度・学校としての枠組みは強固で、成績で生徒たちを格付けし、一方的な規則で生徒を管理する体制に変わりはありません。

そうして一昨年2月、自由が丘学園の中心である鈴木秀一先生が亡くなられて、認可の自由な学校設立の目はもうない、自由が丘もこのまま「フリースクール」で終わるのかと思いかけてきました。しかし、その年の春、養護学校転勤を機に「待てよ、若手、若手と言われた自分も、自由な学校づくりを目指したかつての先輩方の年齢だろ。鈴木先生が亡くなって、誰がこの運動本来の自由な学校づくりを受け継ぐんだ？自分だろ！」と思ったのです。

そうして始めたのが、昨年からの山の手養護学校、北広島市、安平町、月寒子ども館での「自由な教育」について語る会でした。昨年12月10日（土）には私が12月1日に訪問してきた「きのくに子どもの村学園」を映像を交えて報告（参加20名ほど）。そして何度かの話し合いの後、今回の9月2日（土）北大クラ館での堀真一郎さんの講演会となったのです。どうぞ、北海道での認可の自由な学校、まずは「小学校」の実現に向けて、一緒に頑張っていきませんか。共鳴、お力を期待します！

※ 鈴木秀一氏…専門は教育方法学、北大名誉教授、元自由が丘学園代表理事、2015年2月逝去。